特集　本シェルジュが読むポスト・コロナ時代の羅針盤

序章
コロナ禍に歴史から学ぶ
――過去を知り，現在を捉え，未来にどう生かすか

村上　知也
神奈川県中小企業診断協会

2020年11月，「Go To トラベル」を利用して，奈良に出かけました。法隆寺，飛鳥寺，唐招提寺，東大寺――それぞれの歴史に思いを馳せながら。

法隆寺は，７世紀初頭に用明天皇が病気治癒を願って建立を始め，厩戸皇子らが引き継いで建てられました。また，いわゆる「奈良の大仏」である東大寺盧舎那仏像は，８世紀中頃に聖武天皇が建立しましたが，そのきっかけは第一皇子の早逝や，天然痘と言われる疫病の流行，地震の頻発などの多数の災厄から人々を守ってもらうためでした。

今なら，寺院や大仏を建てたくなる気持ちがわかります。疫病は日本のみならず，世界の歴史上で多くの人々に影響を与えています。今回のコロナ禍で歴史は変わるのでしょうか。

１．未来の方針を立てるために

コロナ禍により，生活様式から仕事の仕方までさまざまなことが変わり，「もうコロナ以前の生活には戻れない」という人もいれば，「徐々に元に戻るだろう」という人もいます。

中小企業診断士は未来の世界を予言する必要はないでしょうが，中小企業や自身の未来に対して，どのように考えて行動していくのかという方針を立てることは必要でしょう。

本特集では，ポスト・コロナの指針として，診断士バッジのモチーフでもある羅針盤になれるような考え方を各章で提示していきます。

２．過去から何をどう学ぶか

最初は，「歴史から学ぶ」について考えたいと思います。

私たちは，歴史から何を学べばよいのでしょうか。「２度あることは３度ある」ように，「歴史は繰り返す」のかもしれません。一方で，「３度目の正直」のように歴史は変わっていくもので，まったく同じ歴史が繰り返されることはありえません。

「賢者は歴史に学び，愚者は経験に学ぶ」

愚者ではなく，賢者になるにはどうしたらよいのでしょうか。

まず紹介するのは，2019年に亡くなられた堺屋太一さんの著作です。

歴史からの発想
―停滞と拘束からいかに脱するか

堺屋　太一　著
日経ビジネス人文庫

戦国時代は歴史的に超高度成長期であった。そうした急成長がなぜ起きたのか，「進歩と発展」の後に来る「停滞と拘束」からいかに脱するかを示唆してくれている。信長や秀吉といったおなじみの面々の功績が並ぶが，その補佐役の話や勝てる組織の作り方など，歴史と現代を結ぶ史観にワクワクしてしまう。

1983年に出版後，2004年にリニューアルして再出版されましたが，著者の堺屋太一さんいわく，「20年経っても大きく修正するところはなかった」と述べています。たしかにそうですね。歴史から学ぶといった視点では，20年なんて一瞬の話ですから。

堺屋さんは著書の中で，「歴史が繰り返すというのは，まったく同じ出来事が繰り返されるのではなく，異なる状況の中でも類似の事象が起こることを指しており，その類似性の範囲内で現在の政治や経営に参考になることがある」といった趣旨のことを述べています。本書の一部を引用します。

「何故なら，技術や人口や資源の情況は変化しても，もう一つの歴史の要素である人間の本性はそれほど急激に変わることがないからである」

たしかに，歴史の状況や登場人物はさまざまで，まったく同じになることはありえません。しかしながら，人の本性に大差はないため，類似の事象は繰り返すということですね。歴史から学ぶには，その出来事を起こした人物の思いに考えを馳せることが大事なのだと思います。

3．現在はクライシス未満の危機

続いて，もう一冊。こちらはかなり直接的に，過去の疫病がどのように歴史に影響を与えたかが紹介されています。

人類の選択
―「ポスト・コロナ」を世界史で解く

佐藤　優　著
NHK 出版新書

過去に感染症がいかに時代を動かしてきたか，現在の状況と対比し，分析されている。その歴史的知見を手掛かりに，現在の危機は，人類にとってリスクなのか，クライシスなのかを正確に見極めていく一冊。

疫病が大きく歴史を変えた事例は，世界中にあります。アテネは紀元前430年，疫病の流行により市民と指導者のペリクレスを失い，スパルタに破れました。東ローマ帝国は紀元６世紀のペスト流行で大きく衰退しました。アステカ帝国は16世紀前半，スペイン人のもたらした天然痘により滅んだとも言われています。

疫病で人の動きが制限され，経済を含めた国力が弱まることで，国全体が不安定になり滅んでいった事例は，枚挙にいとまがありません。

現代において，新型コロナウイルスで直接的に滅亡する国は流石にないと思いたいのですが，特に経済状況の変化によってさまざまな格差が生まれることで，不安定さが増していることは間違いないでしょう。著者は，今回の状況を「リスク以上，クライシス未満の危機にわれわれは直面している」としています。

リスク対応であれば，平時に用意したマニュアルで乗り切れるはずです。一方で，国家存亡の危機といったクライシス対応であれば，ある意味，極端で強権的な措置をとることで乗り越えられるのかもしれません（決して望ましい姿ではありませんが――）。

しかし，クライシス未満の現状では，どちらも実行できません。いつもどおりではいけませんが，極論を振りかざすのもふさわしくない状況を，私たちはどうやって乗り越えていくべきでしょうか。

以降の５つの章で，そのヒントを提示していきます。

村上　知也
（むらかみ　ともや）
2008年，中小企業診断士登録。中小企業のIT化支援に取り組んでいる。また，ビジネス書の書評を行う「本シェルジュ」のサイトを運営している。
https://bookcierge.jp/